



「縁結びのハワイアン」 - 葛西に暮らして67年 -

せきぐちちづこ
関口千鶴子

1930年(昭和5年)
神奈川県横浜市生まれ、
西葛西在住



聞こえてくるハワイアン

夜になると、どこからともなく、「アロハ・オエ」を奏でるスチールギターの音が聞こえてきたんです。昭和25、6年ごろ、葛西はほとんどが田んぼ。聞こえてくる方向を見渡すと、南西の方向に家が何軒かあるのが見えました。戦後、ハワイアンと言えばパッキー白片や大橋節夫とかが有名でしたからね。「どんな人が弾いているのかなあ」と思っていたんです。

わたしが生まれたのは横浜なんです。3人きょうだいの真中で、兄とは3つ、弟とは2つ違い。昭和20年の空襲で、東京が焼かれた後、横浜や平塚が危なくなってきた。女学校2年生の15歳の時、今の地下鉄東西線葛西駅近くに越して来たんです。父の会社のコンクリートミキサーの工場があったからね。

四谷にある女学校には、錦糸町駅から省線(現JR)か都電に乗って通いました。錦糸町までのバスがあったけれど、浦安から乗って来る行商の人でいっぱいなの。満員で乗れないと1時間半くらい歩きましたよ。錦糸町は関所でした。そこに出ないとどこにも行けない。新小岩に行くのでさえ錦糸町に出たんですから。

女学校卒業後は、2つの洋裁方式を習いに行きました。文化式の特徴は着易く、ドレメ式は体にぴったりなんです。お花や和裁も習いに行っていたので、青年団に入るまで、地元の人と接する機会はほとんど無かったですね。

青年団は、地域の青年男女の親睦会のようなものなんです。父が「ここに住んでいる以上、地元との付き合いはしなければ」と言っても、兄は本ばかり読んでる人で聞こえないふり。「じゃ、わたしが行くわ」ということになったんです。

最初は、わたしが青年団の会合に顔を出すだけでした。そのうち、機械好きの弟が自分で組み立てたレコードプレーヤーをお寺の本堂に持って行って、流行曲やジャズやクラシックの音楽鑑賞をしたんです。わたしも、「第九」とか「田園」をちょっと解説したりして。みんな喜んで来てくれてね。

その後、農民館ができたので、会議室を借りて社交タ

ンスをやるうということになったんです。戦後、浅草の松屋、銀座の松坂屋、日本橋の白木屋といったデパートの上に日本人が入れるダンスホールができて、ダンスが流行っていたんですね。

農民館ですから、会議室が空いている時だけで、土足禁止なので靴も脱いでね。ダンスは、「PX」と呼ばれるアメリカ軍基地売店に勤めていた近所の人が、ソシアルの基本から教えてくれました。あのころは、ジルバなんか踊ったら不良と言われたんですよ。

青年団のみんなは、夜、仲間の家に集まって練習をしていたようです。でも、わたしは、うちが厳しくて夜は出してもらえないので、行けませんでした。青年団の役員会に行くにしても、帰りが遅くなるとみんなが途中まで送ってくれて、母に引き渡されて戻ってくるという生活でしたからね。わたしが初めてダンスホールに行ったのは、結婚後だったんですよ。

何でも挑戦

昭和28年に23歳で結婚しました。相手は、あのハワイアンの人。主人は4人きょうだいの一番下で、わたしと同年。音楽が好きでハワイアンバンドを組みスチールギターを弾いていたんです。うちの弟がラジオの組み立てをしてあげて、自然に家に来るようになったんですよ。

青年団に入ってすぐに彼だと分かりましたが、そういう話をしたことはなくて。結婚してから「わたしの家まで、ハワイアンが聞こえてきたのよ」って言ったら、「うそだ」って信用しませんでした。

当時、葛西は半農半漁の村。葛西浦漁業組合には組合員が千数百人いて、冬は海苔、夏はアサリ採りをしていました。主人の実家では、つぼ網という定置網漁もしていました。定置網漁は東京都の許可が必要で、組合員の中でも、それができるのは葛西と船堀地区合わせても5、6軒だけでした。

主人も結婚と同時に独立して始めたんです。網の形が壺みたいな胴部分に入ってきた魚を、酸素ポンプを積んで車で、活魚のまま市場へ持って行きます。スズキや鯛も獲れましたよ。11月から3月の海苔の時期は、日曜も正月

もなくて、休みがとれるのは、正月の15日ごろと、漁に出られない小潮の時だけでした。

農作業もあるので、モンペンなどの耕^{かすり}地で作った作業着一式を、嫁入り道具の一つとして持って来ました。母が、近所から借りたものを見て、縫ってくれたんです。作業着の着方も分からないので、親戚の人に教えてもらいましたよ。

新田のバス通りから南にはたった7軒しか家が無かったので、この辺には水道が引かれていませんでした。小川の水はとてもきれいで、お米を研いだり洗濯したりしました。飲み水だけは、べか舟に樽^{ぼとうぼし}をのせて、馬頭橋にある7軒の共同水道に汲みに行きました。べか舟は水上の仕事と交通手段になくはならないものです。忙しい主人を待ってられないし、本家のお嫁さんを見習って、やってみたら上手く操作できたんです。それを見て、近所の若いお嫁さんたちも漕ぐようになりましたね。

結婚当初、近所の人たちは、「何もできない、続かない」と思っていたようです。そのうち、「からだ、大丈夫かあ」と気遣ってくれるようになりました。よく「苦労したでしょう」とか言われますけど、大変だなんて思ったことはないんです。べか舟も農漁業もやったことがないので、興味があつたんです。



◆関口さん撮影の西葛西(左)東西線西葛西駅予定地 昭和49年ころ



(右)工事中の西葛西駅 昭和54年ころ

昭和28年12月、長男を自宅で出産しました。夜中に主人が、新川のお産婆さんをべか舟で迎えに行ったんです。母が毎日のように来て、手伝ってくれました。着るものや乳母車も買ってくれました。でも、地元の人たちは子どもを背中に負っていましたから、乳母車に子どもを乗せたり、ちょっと違ったことをしたりすると笑われたんです。昭和32年に生まれた長女もお産婆さんのお世話になりました。

生活の変化

うちの魚は、築地のほか、浦安市場へも持って行くので、「車の免許、取ったほうがいいんじゃない」と主人に言われたんです。「これからは、女の人でも車に乗る時代が来る。子どもの面倒は見えてあげるから」と実家の母が言ってくれ、亀戸の教習所に行き、昭和35年に免許を取りました。当時は砂利道で砂埃が立ったけど、対向車もなかったし全然怖くなかった。でも、「あ、女が運転している」と言われましたね。

そのうち、海の汚染がひどくなって、昭和37年に組合が漁業権を放棄すると、会社や区役所へお勤めする人もいました。うち

はポリエチレン袋の製造を始めたんです。耕地整理で田んぼが埋め立てられ、区画整理、住宅建設と街の様子がどんどん変わっていくので、街の写真を撮り始めたんです。昭和39年の東京オリンピックを控えて、まさに高度経済成長の時代でしたね。

仕事が変わってから、休みも取れるようになったので、ダンスを再開しました。昭和56年に西葛西にスポーツセンターが開館して、主人がダンスサークルを作ったんです。それまでは、みんなで踊れるような広い場所がなかったのね。本当にダンスが好きな人たちだけでやろうという内輪のサークル。どこのダンスパーティーに行っても、誰とでも何でも踊れるようにというのが方針でした。

■ 地元を根を下ろして

若い時には青年団、結婚してからは農協婦人部、次はPTA、それが終わると町会のことなど、途切れなく活動していましたね。民生委員も46歳から70歳まで24年間やりました。民生委員は、いろんな人のいろんな人生に関わったりしますので、毎日毎日が勉強ね。自分の為になりますから、やって良かったですね。

私たち夫婦は、仕事も音楽、ダンス、ボウリングなどの趣味もずっと一緒でした。主人は平成23年に亡くなりましたが、ポリエチレン製袋の仕事は、今もわたしが続けているんですよ。大きい会社からの仕事は全部お断りして、近くのお得意さんだけ。納品も自分で、いまだにマニュアル車を運転して行きます。

今、わたしは恵まれていて、お嫁さんが家のことをやってくれるから、いろいろ活動ができるんです。「長寿会」でのリズムダンス、コーラス、旅行。お友達とコンサートにも行きます。

毎年5月に、江戸川区無形民俗文化財「葛西大師まいり」があって、弘法大師を祀る霊場を巡拝するんですよ。昭和20年ころ、白装束のおばあさんたちが、お厨子さまを背負って鉦を鳴らして練り歩いていました。近くに来ると、急いで外に観に出たものです。今は簡易になりましたけど、50人くらい参加して、守っているんですよ。

近くの小学校で、海苔すきを教えたり、昔の写真を見てもらいながら話したりすることがあるんですよ。子どもたちが、「昔の葛西は不便そうだけど、住んでみたい」とか、「昔は葛西に牧場があったなんて、知らなかった」とか、自分たちの街に興味を持ってくれるのは嬉しいですね。

葛西に来て67年。主人に出会わなかったら、こんなに長くは住んでいなかったかも知れません。でも、いろいろ長くやってきて、楽しいことばかりです。これからも街の移り変わりを撮り続け、葛西での生活を楽しんでいきたいです。

